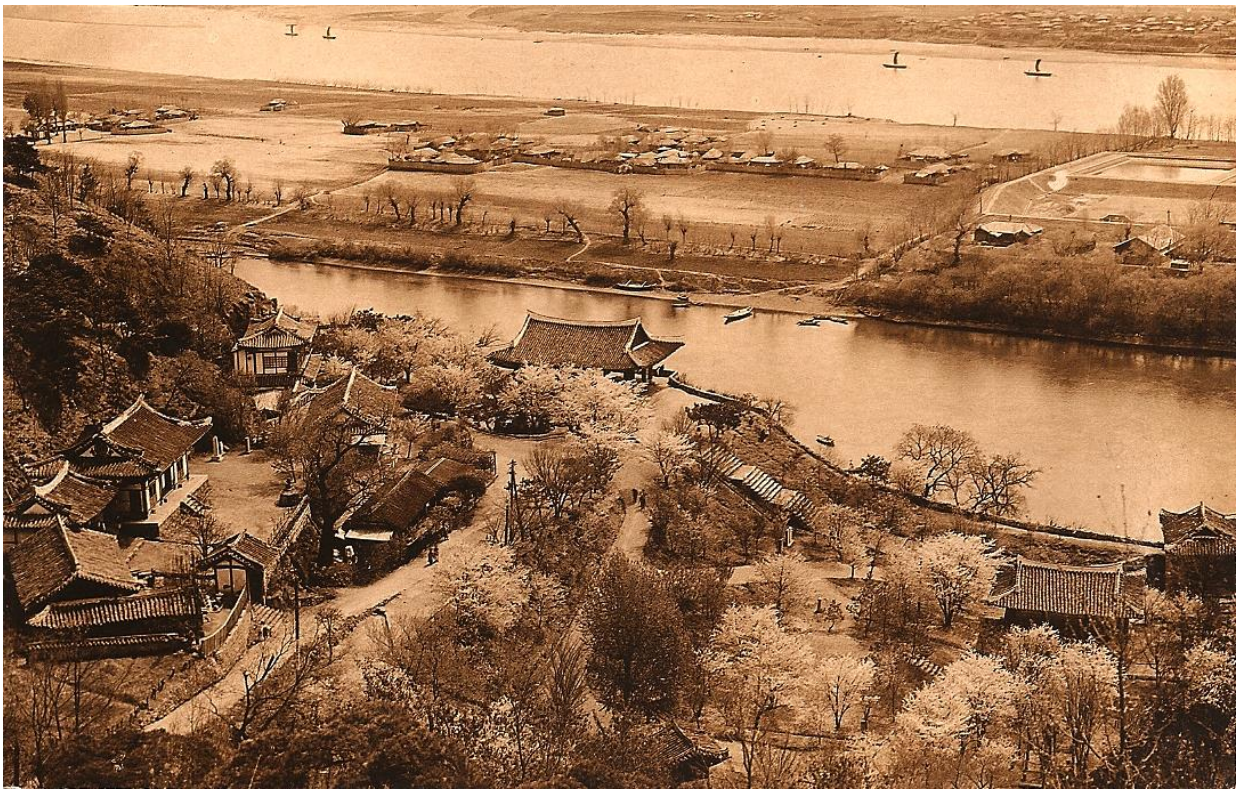
正史を訪れる

十章　高句麗の王統

森隆一



牡丹台と永明寺（Wikipedia「平壌市」より）

はじめに

ここでは朝鮮三国、高句麗・百済・新羅、の王統を主に考察し、併せてそれら各王家の出自も考えていく。方法としては、まず正史を眺め、王統を調べる。続いて、三国史記の王統と比較検討を行う。これは、副次的に三国史記の信頼性の検討の第一歩になると考える。

図9.1と図9.3からは、女王国への行程は、平沢辺りで船を降り、大田を通り、大邱辺りで南下するルートが考えられる。

単単大嶺は長白山脈で、蓋馬高原はその西の鴨緑江が二股に分かれている所でないかと思っている。

Wiki「狼林山脈」に次のように書かれている。

狼林山脈は、朝鮮半島北部にある山脈。蓋馬高原の西を南北に伸びている。現在は朝鮮民主主義人民共和国の慈江道から平安南道、咸鏡南道にかけて属している。狼林山脈は、北の摩天嶺山脈や、南に続く太白山脈とともに朝鮮半島の脊梁山脈(白頭大幹)の一部を成しており、西の黄海側と東の日本海側を分ける分水嶺となっている。大同江、清川江など朝鮮半島北部の大きな川はこの山脈の西側に発している。高い峰は山脈の東側に連なり、西側へ向かって低くなっている。

狼林山脈からは、1000m級の山脈がいくつか南西方向に並行して分かれている。鴨

緑江の南岸を走る江南山脈、清川江に沿う狄踰嶺山脈、妙香山のある妙香山脈、そのほか彦眞山脈、滅悪山脈などがこれにあたる。

ここで、今までに得られた三国の位置を図 9.2 で復習しておこう。

高句麗は、初めは卒本城を、その後は丸都城・国内城を都としていた。晋の時代に(楽浪郡を滅ぼした後)楽浪郡の郡衙の王険城(平壌)に遷都した。領土は遼東半島を除く満州の東南部を主にしていた。

漢末に造られた帯方郡は楽浪郡の屯有県を郡衙とした。大同江の河口辺りと考えている。

馬韓は漢城(京城)辺りで、辰韓はその東で太白山脈の西、現在の江原道辺りと考える。その南は倭であったと考えるが韓との境界は確定できていない。地形からは慶尚道と忠清南道以南が倭と思える。倭と接するようになったのは 6 国から 12 国となった時ではないかと考えている。

帯方郡滅亡前後百済が馬韓の地に造られ、その後辰韓とその南部を併せて新羅が成立した。百済は成立後南部への拡大と高句麗との抗争を繰り返し、6 世紀頃には最後は忠清南道まで後退した。新羅は慶尚北道から慶尚南道北部を 6 世紀頃までには領有していたが経過は把握できていない。

10.1. 高句麗概観

高句麗は紀元より少し前に成立した。都は長白山脈の西側の卒本城・丸都城が長く、後に王倹城(平壌城)を都とした。前者は朝鮮半島にはなく、満州の南東部にある。炭鉱の撫順や鉄鉱の鞍山はこの近くである。また、遼東郡を攻める話と新羅との戦闘の記事はあるが、楽浪郡を攻める話は少ない。楽浪郡へは鴨緑江と山地を越えていく必要があったことと、侵略先としては遼東郡のほうがより魅力があったのであろう。魏の滅亡の後はまた遼東郡を取り戻し、晋の始めに楽浪郡と帯方郡を併せ、現在の北朝鮮から満州南東部及び沿海州の南部を占め最大版図となり、7世紀に唐により滅ぼされた。

ここでは、高句麗の成立と王統を主として考察する。これまでと重複するものもあるが、引用するのも煩わしいので、重複も厭わないで再掲する。

高句麗は句麗とも書かれている。他に(通鑑言)麗王宮、(高)麗人などの用い方もある。高句麗が高氏の句麗というのは、

Wikipedia「北燕」に

北燕 407-436。初代王は高句麗人の後裔で高雲といった。

と書かれていることから、あり得るかもしれないが、高氏以外の句麗は見つかっていない。

注意　以下で引用するWikipedia「高句麗」の内容は現在では大幅に改定され、ここで引用しているものは削除されているものも多い。現在の記事から引用すべきであるが、かなりの変更の必要があり、今回は、現在(2025年)の内容と矛盾しなければ草稿(2015年頃)のままとする。

Wikipedia「高句麗」名称の項に、

高句麗は別名を貊と言う。後漢書によれば、3世紀における高句麗・夫余の2国と沃沮・東濊の2部族は、すべて前漢代の濊貊の後裔である。

と書かれている。後漢書東夷伝でこの記事を確認できていない。名称はともかく、前漢時代には、上記2国2部族は単一の部族であった可能性は考えられる。あるいは、もう少し弱く、単一の部族が住んでいたと認識されていたが、武帝の衛氏朝鮮の攻略後、異なる部族であることが解ってきたとも考えられる。

また、国名の項に

中原高句麗碑などの碑文によれば5世紀中頃には高麗と自称していたことがわかる。中国の王朝がこの自称を公認したのは520年が最初であることが、歴代正史の冊封記事から明らかになっている。以後は高麗が正式名称として認められていた。

と書かれている。915年から1392年の李氏朝鮮の成立までは朝鮮統一王朝としての高麗が続くことになる。

北史では

“元封四年 BC107 武帝が朝鮮をほろぼしたとき、高句麗を県とし、玄菟郡に帰属させた。” **武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟**

と書かれている。BC107 年は高句麗の成立より前であることから、この高句麗は地名と考える。

Wikipedia「玄菟郡」では

紀元前 75 年(元鳳 6 年)になると、玄菟郡は西へ縮小移転された。郡治の高句驪県は現在の遼寧省撫順市内の東部、新賓満族自治県永陵鎮老城村(昔の興京)付近へ移され、元の場所には高句麗侯（後の高句麗王国の前身）が冊封された。

と書かれている。

BC107 年に玄菟郡が出来たとき、玄菟郡には夫租、高句驪、西蓋馬、上殷台の県があった。これが正史での高句驪の初出である。この

高句麗県の主に高句麗侯の爵位が与えられた。

正史からは BC105 年に高句麗県が造られ、BC75 年に高句麗侯が冊封された。一方、高句麗本紀からは、初代東明聖王の即位は BC37 年となっている。ここで、次の疑問を設定しておく。

疑問 9.1. BC75 年に冊封された高句麗侯と高句麗本紀の東明聖王から始

まる高句麗王朝とは同じか異なるのか。

後漢書では、

“王莽初 9 王莽の始め(初年)句驪に匈奴を伐つことを命じた。句驪の人は行くことを望まなかった。・・・莽は大いに喜び、高句驪王を下句驪侯とした。” **發句驪兵以伐匈奴 其人不欲行・・・莽大説 更名高句驪王為下句驪侯**

“建武八年 32 高句麗が使いを送り朝貢した。光武帝はその称号を元の王号に戻した。” **高句驪遣使朝貢 光武復其王号**

と書かれている。三国史記からは、32 年の王は第 3 代大武神王の期間である。王莽初年の記事からは、9 年には高句麗侯は高句麗王になっていたことになる。

三国志には

“漢光武帝八年 32 高句麗王は使いを派遣し朝貢した、これが王と称することの最初である。” **高句麗王遣使朝貢 始見稱王**

と書かれている。

この後、高句麗は大凡 700 年続いた。首都は、卒本城、国内城、平壌城 427-668 と変わった。卒本城は現在の遼寧省本渓市桓仁満族自治県(吉林省との省境近くの鴨緑江の少し北)にあった。丸都城は国内城と一体のも

のである。

世界史の窓「丸都城」では

高句麗の都とされた山城。鴨緑江の北岸、現在の輯安にあり、近くに広開土王碑が建てられている。遼東太守公孫氏に圧迫された高句麗は、２０９年に鴨緑江北岸の山中に丸都城を築造した。さらに３４２年に、丸都城の南の平地に、平城の国内城を築造し、丸都城と合わせて高句麗の都城とした。高句麗の全盛期の広開土王（好太王）の碑が国内城近くに建造されている。その後、長寿王の時の４２７年に都は南方の大同江流域の平壌に移された。高句麗の都であるが、鴨緑江の北岸なので、現在は中国領になっている。丸都城、国内城、広開土王碑は吉林省集安市にある。

王城+王都制としておこう。飛鳥京と高安城も同様のものとされていが、こちらは王都(宮)＋避難城といえるであろう。さらに、扶余と慶州も同様と思われる。これらに対し、京城は王城制といえる。

いずれも長白山脈からその支脈の千山山脈に続く縊れ部分にある。卒本城と丸都城は西南の満州側に、平壌城は南東の(北)朝鮮側にある。この長白山脈は鉱物資源が豊かで、北朝鮮の経済的基盤となっているということである。撫順炭鉱と鞍山の鉄鉱石も長白山脈の西である。中国の王朝が相当なコストを使っても遼東半島は手放さなかったのはこの為か。

ふれあい中国＞中国観光ガイド＞集安観光スポット＞高句麗王城、王陵、墓葬＞高句麗王城、王陵、墓葬写真集 http://www.chinatrip.jp/jian/attraction/album-431.htm **に次の写真があった。**[1]

図 10.1. 国内城丸都城

晋書には高句麗条はない。宋書では

“東夷の高句麗国は、いま、遼東郡を治めている。”

東夷高句驪國 今治漢之遼東郡

西晋までの王朝は遼東を支配していた。晋朝の内乱により中国の外部への圧力が衰え、北部は五胡十六国の時代となった。これに乗じて、高句麗は遼東郡・玄菟郡・楽浪郡・帯方郡を支配した。この辺りから北魏までが高句麗の最大版図であったかもしれない。

倭の五王が高句麗の狼藉により朝貢できないと訴えたのもこの時である。

9.2. 正史から

正史の記事のうち、高句麗の出自・王統と目につく風俗の記事をみていく。

出自と地勢　まずは、出自と地勢に関する記事を眺めていく。

“高句驪は遼東の東千里にあり、南は朝鮮と濊貊、東は沃沮、北は扶余と接する。”

高句驪 在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與夫餘接（後漢、三）

は既に見てきた。

“都は丸都の麓にある。”　**都於丸都之下**（三）

句驪は貊ともいう。小水のほとりに住む別種があり、小水貊という。

句驪一名貊 有別種 依小水為居 因名曰小水貊（三）

小水は何処にあるわからないが、小水貊は前百済と関連するかもしれないと想っている。

“東夷の高句麗国は今漢の遼東郡を治めている。”

東夷高句驪國 今治漢之遼東郡（宋）

東夷の高麗国は西で魏虜と接している。　**東夷高麗國 西與魏虜接界**（南斉）

“高句驪者は・・・その国は漢の玄菟郡で、遼東の東千里の所にある。漢と魏の時代には南は朝鮮・濊貊と接し、東は沃沮と北は夫餘と接していた。”

高句驪者・・・其國 漢之玄菟郡也 在遼東之東 去遼東千里 漢魏世 南與朝鮮 濊貊東與沃沮 北與夫餘接（梁）

“高句麗の夫余の出で、先祖は朱蒙と言っている。・・・遼東の南千里余りで、東は柵城に至り、南は小海に至り、北は夫余の旧領に至る。”

高句麗者 出於夫餘 自言先祖朱蒙・・・遼東南一千餘里 東至柵城 南至小海 北至舊夫餘（魏）

“高句麗の夫餘の出で、先祖は朱蒙と言っている。・・・その地の東は新羅で、西は遼水を渡り 2 千里で、南は百済と接する。北隣は千余里で靺鞨である。平壌城で治めている。”

高麗者 其先出於夫餘・・・其地 東至新羅 西渡遼水二千里 南接百濟 北鄰靺鞨千餘里 治平壤城（周）

“高麗の先祖は夫餘である。・・・その国は東西 2 千里で南北は千里余りである。都は平壌城である。・・・また、国内城と漢城がある。”

高麗之先 出自夫餘・・・其國東西二千里 南北千餘里 都於平壤城 ・・・復有國内城 漢城（隋）

“高句麗は遼東の南千里に在る。その先祖などは北史に書かれている。・・・王都は丸都山の麓にある。”

高句麗 在遼東之東千里 其先所出 事詳北史・・・其王都於丸都山下（南）

“高句麗は夫餘の出で、先祖は朱蒙と言っている。・・・その国は東は新羅で、西は遼水を渡り 2 千里で、百済と接し、隣は靺鞨である。都は平壌上である。・・・他に国内城と漢城を別都としている。国中で三京と呼んでい

る。また、遼東を領有し、玄菟など数十城を有する。”　　**高句麗**

其先出夫餘・・・其國 東至新羅 西度遼 二千里 接百濟 鄰靺鞨・・・都平壤城・・・其外復有國内城及漢城 亦別都也 其國中呼爲三京 復有遼東 玄菟等數十城（北）

高麗は扶餘から分かれたものである。都は平壤城で楽浪郡の在った所で京師から東へ 5100 里の所である。東へ海を渡ると新羅で西北へ遼水を渡ると営州で、南へ海を渡ると百済に至る。北は靺鞨至る。

高麗者 出自扶餘之別種也 其國都於平壤城 即漢樂浪郡之故地 在京師東五千一百里 東渡海至於新羅 西北渡遼水至於營州 南渡海至於百濟 北至靺鞨（旧唐）

新唐書は旧唐書とほぼ同じである。

どの所も高句麗の出自は夫余としている。国名は周・隋・唐各書と北書は高麗、これら以外は高句麗を用いている。

百済・新羅は平壤遷都後のことである。高句麗の南は、三国志では朝鮮(楽浪郡)、魏書では小海、北史では百済となっている。東は、梁書と南史では濊貊が周書では新羅となっている。

唐書では、海路で書かれている。新羅に行くには、東の港へ行きそこから船で(南へ)行くことになる。海路が安全ならば、陸路で山道を行くより、近くまで船で行った方が、便利で楽である。時代は異なるが、女王国への行程でも、初めは船で韓にいくことになっている。唐の時代には日本海の沿岸航海が安全に行えるようになったということであろう。

風俗　などについて、目にとまった簡単な記事を挙げていく。

“ことばや物事の多くは扶余と同じであるが、気質や衣服は異なる。”

言語諸事 多與夫餘同 其性氣 衣服有異（梁）

“気性と衣服は異なるところがある。兇急な性質で氣力がある。戦いに慣れ侵略を好む。沃沮や東濊はみな服属している。”

其人性兇急 有氣力 習戰鬥 好寇鈔 沃沮 東濊皆屬焉（後漢）

“そこは山谷の中にあった。家は草ぶきであった。寺や神廟、王宮や官庁は瓦を用いている。”

其所居必依山谷 皆以茅草葺舍 唯佛寺 神廟及王宮 官府乃用瓦（唐）

衣服が異なるのは高句麗が中国化したのではないか。

高句麗への公式な仏伝は 372 年である。

“その馬はみな小さく、山では便利である。国人は気力があり戦闘に習熟している。沃沮・東濊はこれに従う。”

其馬皆小 便登山 國人有氣力 習戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉（三）

高句麗は建国以来 700 年近くたえまなく中国王朝の征討や遼東郡・玄菟郡との抗争を繰り返してきた。最終的には唐に負けたが、隋の煬帝の親征には耐え抜いた。これが出来たのは、高句麗は山脈地帯にあり、攻略しに

くいことと、鉱物資源が中国の支配を拒み、長続きした要因と考えていた。其馬皆小 便登山 はこの考えの補強になる。

馬に関しては、都井岬の馬を連想させる。移住者によってもたらされたのかもしれない。あるいは、ラバ(騾馬)やロバ(驢馬)も考えられるのではないか。

ぴんいん　騾：luó、羅：luo、驢：lǘ、麗：lì、句：jù

朝貢と抗争および**王統** を見ていく。

“建武八年 32 高句麗が使いを送り朝貢した。光武帝はその王号を再び与えた。”　**高句驪遣使朝貢 光武復 其王號**

“建武二十五年 49 句驪は右北平・漁陽・上穀・太原を侵寇した。遼東太守の祭肜は”　**句驪寇右北平 漁陽 上穀 太原**（後漢）

“和帝元興元年 105 后句驪王の宮は・・・遼東にまた入った。”

后句驪王宮 復入遼東（後漢）

“安帝永初五年 111 宮は使いを送り貢獻し、玄菟郡に帰属することを求めた。”　**宮遣使貢獻 求屬玄菟**（後漢）

王莽により下句麗侯とされていた。

太原を山西省の太原では少し遠い気がするが、草原を騎馬での移動は思

ったよりも容易かもしれな。

高句麗本記からは、永初五年 111 の王は第 6 代太祖大王宮 53-146 で、建武二十五年 49 の高句麗王は宮の前王の、第 5 代慕本王 解憂 48-53 である。

ぴんいん　后：hòu、高：gāo

“元初五年 118 濊貊とともにまたを玄菟郡を侵寇し、華麗城を攻めた。”

復與濊貊寇玄菟 攻華麗城（後漢）

建光元年 121 春 幽州刺史の馮煥と玄菟郡の太守の姚光と遼東郡の太守の蔡諷らはこれを撃った。

幽州刺史馮煥 玄菟太守姚光 遼東太守蔡諷等 將兵齣塞擊之（後漢）

“夏 遼東鮮卑 8000 人余りと遼隊を攻めた。”

復與遼東鮮卑八韆餘人攻遼隊（後漢）

“秋 宮は馬韓を率いて濊貊数千騎とで玄菟郡を囲んだ。”

宮遂率馬韓 濊貊數韆騎圍玄菟（後漢）

“是歳 宮が死に、子の遂成が立った。” **宮死 子遂成立**（後漢）

“遂成が死に、子の伯固が立った”。 **遂成死 子伯固立**（後漢）

“桓之間 147-167 また遼東郡の西安平を侵した。” **復犯遼東西安平**（後漢）

“建寧二年 169 玄菟郡の太守の耿臨はこれを討った。”

玄菟太守耿臨討之（後漢）

“本は涓奴部・絶奴部・順奴部・灌奴部・桂婁部の五族があった。本は涓奴部から王を立てたが、今は桂婁部から王を立てている”。 **本有五族**

有涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王 稍微弱 今桂婁部代之（三）

王の出身部が涓奴部から桂婁部に替わったと書かれている。後漢書と三国志の時代にはこの変更が書かれていないので、後漢の成立前のことと考える。新との抗争の過程で宮までに変わったとしておく。高句麗本記では、宮は第 2 代琉璃王子古鄒加再思之子となっている。なお、高句麗本記ではこれに対応する記事は見つけていない。

桂婁部以外は〇奴部となっているのは気にかかる。

（7 章付録 2 作業仮説候補 5.1 への補足）

“伯固が死んだ。子供は 2 人いた。長子は拔奇といい、小子は伊夷模といった。拔奇は王としたふさわしくなく、国人は伊夷模を王として共立した。”

伯固死 有二子 長子拔奇 小子伊夷模 拔奇不肖 國人便共立伊夷模爲王（三）

“建安中 196-220 公孫康は軍を出し、これを撃った。”**公孫康出軍擊之**(三)

“伊夷模は子がなかった。淫灌奴部の位宮を王とした。”

伊夷模無子 淫灌奴部 生子名位宮 伊夷模死 立以爲王（三）

これで高句麗王は

宮 →（子）遂成 →（子）伯固 →（子）伊夷模 → 位宮

（涓奴部 → ）桂婁部 → 淫灌奴部

と変わったことになる。高句麗王は五部族の中から選ばれていた。交替は

後継がいないか、後継としてふさわしくない場合に行われたようだ。

“景初二年 238 太尉の司馬王は衆を率いて、公孫淵を討った。宮は主簿大加と将兵 1000 人を派遣し、助けた。”

太尉司馬王率衆討公孫淵 宮遣主簿大加 將數千人助軍 （三）

“正始三年 242 宮は西安平を侵寇した。” **宮寇西安平**（三）

“其五年 244 幽州刺吏の毋丘儉の破る所となった。”

爲幽州刺吏毋丘儉所破（三）

“高句驪王の高璉は(東)晋の安帝の 413 義熙九年に長史の高翼を遣わして奉表し、白馬を献じた。璉を使持節都督營州諸軍事征東將軍高句驪樂浪公に叙した。” **高句驪王高璉 晉安帝義熙九年 遣長史高翼奉表獻赭白馬 以璉為使持節 都督營州諸軍事 征東將軍 高句驪 樂浪公**（宋）

晋書安帝紀で

“義熙九年 413 是歳 高句麗と倭国および西南夷の銅頭大師が朝貢した。”

高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物

を見つけた。朝貢があるのに高句麗条がないのは何故か。何らかの理由で高句麗を無視しているとしか思えない。

璉は 20 代の長寿王で、在位は 416 年から 491 年。413 年の王は広開土王であるが、三国史記には対応する記事を見つけていない。

Wikipedia「営州」では

後漢末の遼東で軍閥の公孫氏が割拠すると、渤海を渡って山東半島の一部をも版図に収め、ここに営州刺史をおいた。南北朝時代に、北魏が北燕を滅ぼすと、444年(太平真君5年)、北燕遺領に営州を設置、州治を竜城とした。

Wikipedia「北燕」では

北燕は中国の五胡十六国時代の王朝のひとつ(407年 - 436年)。鮮卑化した漢人将軍馮跋が、後燕王の慕容熙を廃して建国した。首都は黄龍府すなわち龍城(遼寧省朝陽市)。主に遼西地方を領有した。

“宋の末に、高麗王樂浪公の高璉を 使持節散騎常侍都督營平二州諸軍事車騎大將軍開府儀同三司に除した。” **宋末 高麗王樂浪公高璉爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 車騎大將軍 開府儀同三司**（南斉）

Wikipedia「幽州」では

400年(咸寧2年)には後涼により幽州東部に平州を設置されている。

とある。晋書の地理には平洲があり遼東郡以東を幽州から分離したようだ。

“高璉は100歲を超えて卒した。高麗王樂浪公高雲を使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高麗王 樂浪公に叙した。”

高璉年百餘歲卒隆昌元年494 以高麗王樂浪公高雲爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高麗王 樂浪公（南斉）

ここで、高雲は第21代文咨明王である。

10.3. 貊の記事

後漢書巻八十五東夷列傳第七十五の始に次がある。

“王莽が帝位を簒奪したとき、貊人が辺境を侵した。建武初年 25、再び朝貢した。このとき、遼東太守の祭肜は北方を威圧した。(聲行海錶: 不明)これより濊・貊、・倭、・韓 ・萬里を超え朝獻した。”

王莽簒位 貊人寇邊 建武之初 復/複來朝貢 時遼東太守祭肜威聲北方 聲行海錶 于是濊、貊、倭、韓 萬浬/裏/裡朝獻

高句驪

“高句驪は遼東の東千里に在って、南は朝鮮濊貊と東は沃沮と北は伕餘と接っしている。”

高句驪 在遼東之東韆浬/裏/裡 南與朝鮮、濊貊 東與沃沮 北與伕餘接

“高句麗は貊ともいう。別種があり、小水の畔に住んでいる。これにより小水貊という。”

句驪一名貊 有別/彆種 依小水為居 因名曰小水貊

“さらに高句驪王を下句驪侯とした。これより貊人は辺境をますます侵した。”

更名高句驪王為下句驪侯 于是貊人寇邊愈甚

“元初五年 118、また濊貊とともに玄菟郡を侵し、華麗城を攻めた。建光

元年春に幽州刺史の馮煥、玄菟太守の姚光、遼東太守の蔡諷ら將兵はこれを撃った。・・・(理解できず)・・・。この年、宮が死に、子の遂成が立った。・・・。あくる年、遂成は漢の生口を還し、玄菟郡に詣で降った。”

元初五年 復/複與濊貊寇玄菟 攻華麗城 建光元年春 幽州刺史馮煥、玄菟太守姚光、遼東太守蔡諷等 將兵齣塞擊之 捕斬濊貊渠帥 獲/穫兵馬財物 宮迺遣嗣子遂成將二韆餘人逆光等 遣使詐降；光等信之 遂成因據險阨以遮大軍 而潛遣三韆人攻玄菟、遼東 焚城郭 殺傷二韆餘人 于是發/髮廣暘/陽、漁暘/陽、右北平、涿郡屬國三韆餘騎同救之 而貊人已去 夏 復/複與遼東鮮卑八韆餘人攻遼隊 殺略吏人 蔡諷等追擊于新昌 戰歿 功曹耿耗、兵曹掾龍耑、兵馬掾公孫酺以身捍諷 俱歿于陣 死者百餘人 鞦 宮遂率馬韓、濊貊數韆騎圍玄菟 伕餘王遣子尉仇檯/臺/颱將二萬餘人 與州郡並/併力討破之 斬首五百餘級

是歳宮死 子遂成立 姚光上言欲因其喪發/髮兵擊之・・・安帝從之 明年 遂成還漢生口 詣玄菟降

“遂成が死に子の伯固が立った。その後濊貊は服従し、東の果ては大事はなかった。順帝の陽嘉元年 132、玄菟郡に屯田六部を置いた。桓帝の間に遼郡の東西を侵した。・・・建寧二年 169 玄菟太守耿臨はこれを討ち。数百の首級を得た。伯固は降服し、玄菟郡に属することを乞うた。”

遂成死 子伯固立 其後濊貊率服 東垂少事 順帝暘/陽嘉元年 置玄菟郡屯田六部質、桓之間 復/複犯遼東西安平 殺帶方令 掠得樂浪太守妻子 建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首數百級 伯固降服 乞屬玄菟雲

東沃沮

“東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿っている。北は挹婁・夫餘、南は濊貊と接する。”

東沃沮在高句驪蓋馬大山之東 東濱大海 北與挹婁、伕餘 南與濊貊接

濊

“至元封三年 BC108 に朝鮮を滅ぼし、樂浪・臨屯・玄菟・真番の四郡を置いた。元封三年 BC108 に朝鮮を滅ぼし、樂浪・臨屯・玄菟・真番の四郡を置いた。昭帝始元五年 BC82 臨屯郡･真番郡を樂浪郡か玄菟郡に併合した。また玄菟郡は高句麗を従えている。單單大領の東の沃沮・濊貊は樂浪郡か玄菟郡に属する。”

至元封三年 滅朝鮮 分置樂浪、臨屯、玄菟、真番四郡 至昭帝始元五年 罷臨屯、真番 以並/併樂浪、玄菟 玄菟復/複徙居句驪 自單單大領已東 沃沮、濊貊悉屬樂浪玄菟

貊の用い方は、単独で用いるのと小水貊および濊貊の 3 通りである。このうち濊貊が殆どで他和僅かである。このうち、句驪一名貊については殆ど考慮してこなかった。というか考慮する余裕がなかった。そのため、三国の王統を除き、倭と関連する記事を主に取り上げた。

ここで、図 4.7　2 世紀の東夷を再掲する。

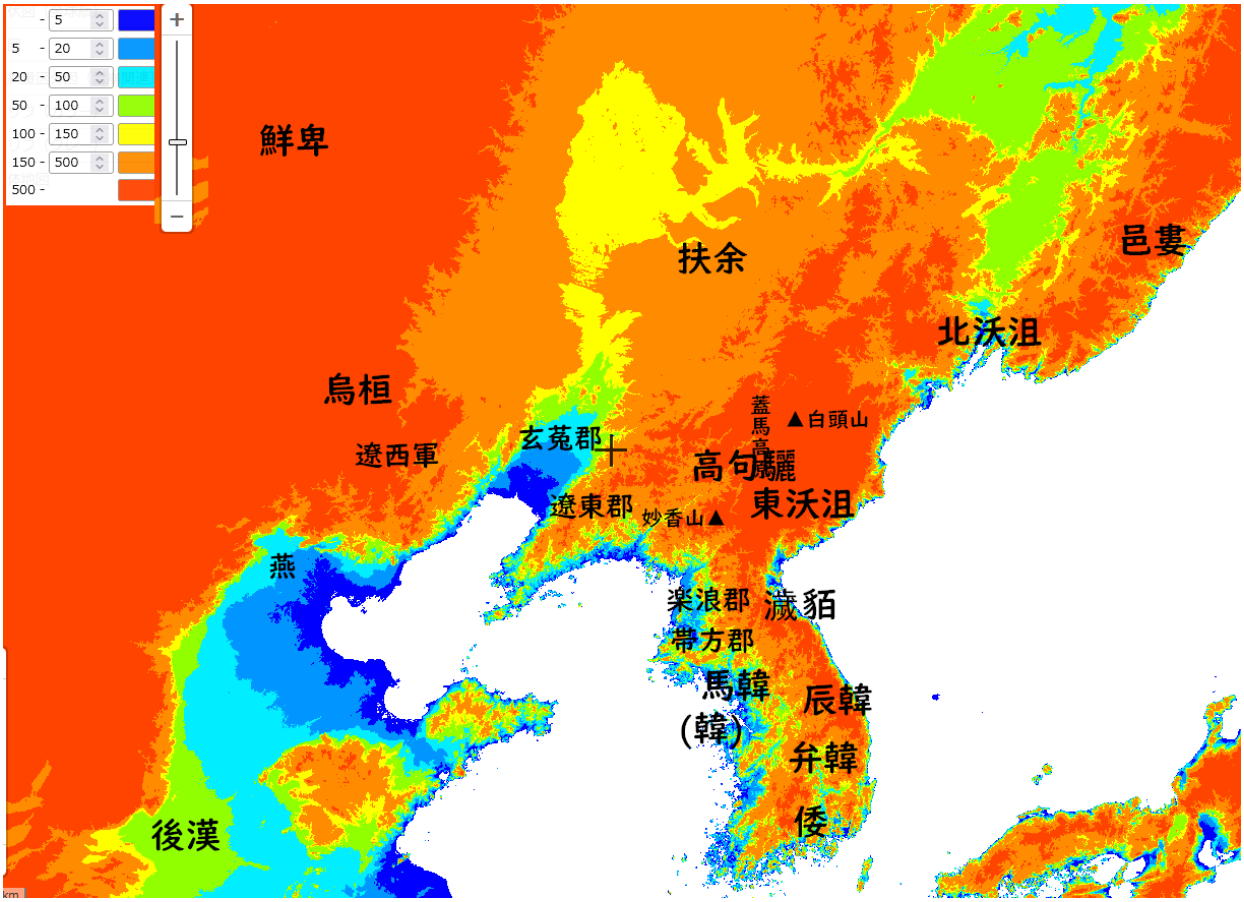


図 4.7　2 世紀の東夷

図　4.7 では濊貊が用いられている。他の地名を見れば、濊貊で 1 つとして扱われていると考える。

図 4.7 は Wikipedia「東夷」から写したものである。ここでは他の時代の地図も掲げられているの。このうち濊・貊が書かれているのは紀元前 1 世紀だけである。次の図　9.1 は両図から濊・貊の周辺を切り取って並べたものである。

武帝が漢四郡を設置したのは紀元前 108 年で、真番郡・臨屯郡が廃され

たのは紀元前 82 年である。また、帯方郡が設置されたのは 204 年とされている。

図 10.1 紀元前 1 世紀の東夷

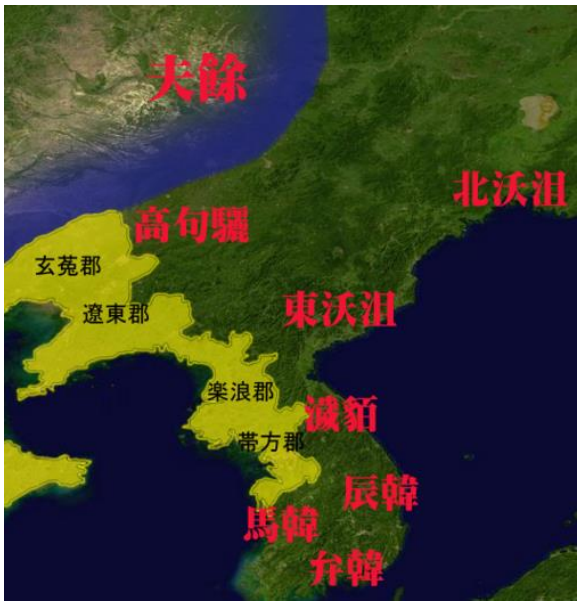


図 10.2 2 世紀の東夷

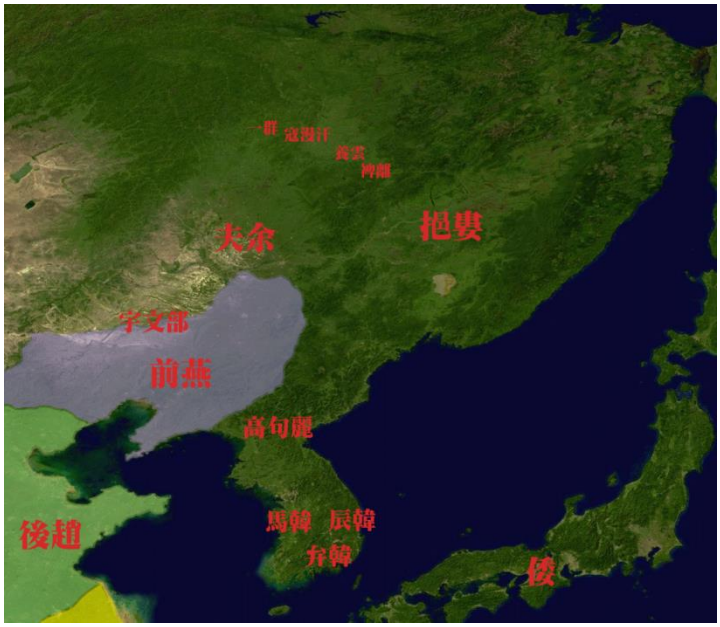


図 10.2 2 世紀の東夷

画像は Wikipedia「東夷」より

（

図 10.4 朝鮮の地勢

図 10.1 では濊と貊が別々で用いられ、位置もかなり離れている。一方、図 10.2 では濊貊一語として書かれ、左図の濊と貊の中間辺りに高句麗と書かれている。図 10.4 から、図 10.1/の濊と貊の間に長白山脈が走っている。言い換えれば、長白山脈の西部と西に濊、東南に貊がいたことになる。

ここで、上で引用した記事の内から次の 2 つを基に貊について考えてみよう。

“高句麗は貊ともいう。別種があり、小水の畔に住んでいる。これにより小水貊という。”（高句麗条）

“東沃沮は高句麗の蓋馬大山の東にあり、大海に沿っている。北は挹婁・

夫餘、南は濊貊と接する。”（東沃沮条）

濊は長白山脈の東から西へ

韓の記事　　の韓条

“全部で 78 国である。伯濟はこのうちの 1 国である。”（韓条、10.3 で扱う）

後漢書

10.4. 高句麗の王統

高句麗本記から高句麗の王の一覧を表にする。

表 10.1. 高句麗の王統

1	朱蒙	鄒牟，衆解	東明聖王		BC37-BC19	
2	類利	孺留	瑠璃明王		BC19-18	朱蒙元子
3	無恤		大武神王	大解朱留王	18-44	琉璃王第三子
4	解色朱		閔中王		44-48	大武神王之弟
5	解憂	解愛婁	慕本王		48-53	大武神王元子
6	宮	小名 於漱	太祖大王	國祖王	53-146	琉璃王子古鄒加再思之子
7	遂成		次大王		146-165	太祖大王同母弟
8	伯固		新大王		165-179	太祖大王之季弟
9	男武	伊夷摸	故国川王	國襄王	179-197	新大王伯固之第二子
10	延優	位宮	山上王		197-227	故國川王之弟也
11	憂位居	少名 郊	東川王	東襄王	227-248	山上王之子
12	然弗		中川王	中壤王	248-270	東川王之子
13	薬盧	若友	西川王	西壤王	270-292	中川王第二子
14	相夫	歃矢婁	烽上王	雉葛王	292-300	西川王之太子
15	乙弗	憂弗	美川王	好壤王	300-331	西川王之子古鄒加咄固之子
16	斯由	釗	故国原王	國上王	331-371	美川王太子
17	丘夫		小獣林王	小解朱留王	371-384	故國原王之子
18	伊連	於只支	故国壤王		384-391	小獣林王之弟
19	談徳		廣開土王		391-413	故國壤王之子
20	巨連	璉	長寿王		413-491	広開土王之元子
21	羅雲		文咨明王	明治好王	491-519	長壽王之孫
22	興安		安臧王		519-531	文咨明王之長子
23	寶延		安原王		531-545	安臧王之弟
24	平成		陽原王	陽崗上好王	545-559	安原王長子
25	陽成		平原王	平崗上好王	559-590	陽原王長子
26	元	大元	嬰陽王	平陽王	590-618	平原王長子
27	建武	成	榮留王		618-642	嬰陽王異母弟
28	臧	寶臧	寶臧王		642-668	建武王弟大陽王之子

表 10.1 で王の在位期間は Wikipedia から得た。その他のデータは三国史記高句麗本記から抜き出した。三国史記では諡号・諱の順に書かれているが、正史では諱が書かれているため、逆にした。なお、「weblio」から、季弟は一番下の弟、末弟である。また、元子は皇太子、太子である。

前節で、高句麗の王統に関して次を得た。

宮→(子)遂成→(子)伯固→(子)伊夷模→位宮

(涓奴部 →) 桂婁部 → 淫灌奴部

三国志では、位宮は淫灌奴部の生まれとなっている。伊夷模の前の何人かは桂婁部の王となる。後漢書で王は本涓奴部と書かれていることと、宮に関する記事には部出身部の記事がないことから、涓奴部から桂婁部への交替は、宮の即位前で、後漢以前か後漢のごく初期と考える。

一方、表 10.1 では、

宮→(同母弟)遂成→(季弟)伯固→(子)伊夷模→(弟)位宮

となっている。宮の在位年数が 94 年であることから、同母弟・季弟と継がれることについては疑問が残る。

上記 5 人の王で、正史の記年記事に現れるものの最初のものは、後漢書の 后句驪王宮 和帝元興元年 105 復入遼東 である。さらに、宮は建光元

年 121 に崩御したことになっているが、表 10.1 では、在位期間は 53 年から 146 年となっている。

とにかく、在位期間まで考慮すると疑問が生じるが、宮から位宮までは王名と順番については正史と高句麗本記とは一致している。

表 10.1 で宮以前の王を見ていくと

朱蒙→(元子) 類利→(第三子) 無恤→(弟) 解色朱→(無恤元子) 解憂

→(類利孫)宮

となる。

桂婁部から涇灌奴部の交替を、異なる部族の出身者の位宮を伊夷模の弟として組み込んだように、宮を過去の王に関連付けて組み込んだのではないか、宮の時に涓奴部から桂婁部への交替が行われたのではないかと考える。これを作業仮説としておく。

作業仮説 10.1. 高句麗では、宮の時に涓奴部から桂婁部への交替が行われ、位宮のときに桂婁部から涇灌奴部への交替が行なわれた。

宮の即位年 53 年は次の記事の 32 年より後である。

“建武八年 32 高句麗が使いを送り朝貢した。光武帝はその王号を再び与えた。”

高句驪遣使朝貢 光武復 其王號

逆ならば、即位後国を立てなおした後朝貢したことになる。

後漢の成立は 25 年である。新の時代に

“王莽初 9 句驪に匈奴を伐つことを命じた。句驪の人は行くことを望まなかった。これを強く迫ると、みなは塞をほうきし、窃盗を行った。遼西郡の大尹の田譚は追撃したが、戦死した。王莽は将にこれを撃つことを厳命した。句驪侯を塞に誘い込み、これを斬り、首を長安に送った。莽は大いに喜び、高句驪王を下句驪侯とした。これより貊人が辺境をたびたび侵すようになった。”

發句驪兵以伐匈奴 其人不欲行 強迫遣之 皆亡齣塞為寇盗 遼西大尹田譚追擊 戰死 莽令其將嚴尤擊之 誘句驪侯騶入塞 斬之 傳首長安 莽大說 **更名高句驪王為下句驪侯 于是貊人寇邊愈甚**（後漢）

という気維持がある。王莽により下句驪侯とされた高句驪王は涓奴部出身で、さらに新の滅亡前後で桂婁部に替ったか、2 朝対立時代を経て宮が統一したのではないかと想っている。 %% 作業仮説候補

王朝の交替を処理するのに、前王の弟とするのと先の王の孫とする手法を推測した。日本書紀を見ていくとき、このことは参考になると考えている。ただし、三国史記は金富軾により、1143 年に執筆開始され、1145 年に完成した。日本書紀の完成より 400 年程後になる。

位宮以後を見ていく。単独の王朝の正史の高句麗条で高句麗王の系譜をある程度記しているものは北朝の魏書と南朝の梁書である。なお、北史は通史であり、当然一番長い。

Wikipedia「北魏」では

北魏 386-534 は、中国の南北朝時代に鮮卑族の拓跋氏によって建てられた国。前秦崩壊後に独立し華北を統一して、五胡十六国時代を終焉させた。広義には東魏 534-550 と西魏 535-556 もこれに含まれる。

Wikipedia「梁（南朝）」では

梁 502-555 は、中国の南北朝時代に江南に存在した王朝。

武帝の天監年間は、九品官人法の改定、梁律の頒布、租税の軽減などの政策によって治世は安定し、南朝の全盛期を生み出した。また、旧来の貴族の子弟が入る国子学以外に、寒門の子弟を対象とした教育施設として新たに五館を設置するなど学問を奨励したことによって、文化は大いに繁栄した。

と書かれており、32 年間は両王朝が並立したことになる。比較的安定した時期ではなかったかと思っている。

表 9.1 で 386 年の高句麗王は 18 代故国壤王伊連で、534 年は 23 代安原王寶延、555 年は 24 代陽原王平成となっている。

魏書に書かれている系統を系図風に図示してみると

朱蒙 1→閭達→(子) 如栗→(子) 莫來—→(子孫相傳 裔孫) 宮 6

→(曾孫) 位宮 10→(玄孫) 乙弗利 15→(利子) 釗 16

→(曾孫) 璉 20→(孫) 雲 21→(世子) 安 22→(子) 延 23

→(子) 成 24

となる。裔孫は遠い子孫。ウィクショナリ「孫」では

子 →孫→曽孫→玄孫→来孫→昆孫→仍孫→雲孫

とされている。

梁書では

宮 6→(子) 伯固 8→(子) 伊夷摸 9→(子) 位宮 10→・・・

→乙弗利 15→(子) 釗 16→垂 17→(子) 寶 18→安 19

→(孫) 璉 20→(子) 雲 21→(子) 安 22→(子) 延 23

北史では

朱蒙 1→(子) 如栗→(子) 莫來→(裔孫) 宮 6→(子) 伯固 8

→(子) 伊夷摸 9→(子) 位宮 10→(玄孫) 乙弗利 15→(子) 釗 16

→垂 17→ 寶 18→安 19→(釗曽孫) 璉 20→(孫) 雲 21

→(世子) 安 22→(子) 延 23→(子) 成→(子) 湯

これに新唐書の 元 26→(弟)建武 27→藏 28 を加え、次を得る

表 10.2. 正史による高句麗の王統

朱蒙 1→閭達→(子) 如栗→(子) 莫來—→(子孫相傳 裔孫) 宮 6

→(子) 伯固 8→(子) 伊夷摸 9→(曽孫) 位宮 10→(玄孫) 乙弗利 15

→(利子) 釗 16→垂 17→ (子)寶 18→安 19→(釗曽孫) 璉 20

→(孫) 雲 21→(世子) 安 22→(子) 延 23→(子) 成 24→(子) 湯

→元 26→(弟)建武 27→藏 28

ここで、璉 20 以降は藏 28 と湯 25 のを除き、名前に正史の王名を含む。湯を陽成の陽成とすれば合う。

周書では

“(訳)”

璉五世孫成 大統十二年 546 遣使獻其方物 成死 子湯立 建德六年 577 湯又遣使來貢

%% これを他の王にも

表 10.1 と表 10.2 では、朱蒙と宮の間は全く異なる。これは、正史では朝貢していた王の名を記録したが、かれらは宮とは別の系列で、宮の時に涓奴部から桂婁部への交替が行われたことへの傍証となるのではないか。

位宮 10 と乙弗利 15 の間がぬけている。表 9.1 から、11 代東川王の在位期間は 227 年から 248 年、第 14 烽上王の在位期間は 300 年から 331 年

である。一方、西晋は265年から316年で、晋書で高句麗を無視し、王の記録も残っていなかったと考える。

次の作業仮説を設定する。

作業仮説 9.2. 高句麗の王統では、第6代太祖大王 宮 以降の王は正史の王と一致する。

表10.2において、11代憂位居から14代相夫が抜けている。位宮10から相夫14までの諡号と在位期間を抜き出す。

10代山上王	延優（位宮）	197-227
11代東川王	憂位居	227-248
12代中川王	然弗	248-27
13代西川王	薬盧（若友）	270-292
14代烽上王	相夫（歃矢婁）	292-300

この辺りの高句麗の状況について、Wikipedia「高句麗」丸都城遷都と周辺諸国との戦い を引用しておく。

2世紀末、後漢が分裂状態に陥ると、遼東地方では公孫度によって公孫氏政権が打ち立てられた。一方の高句麗では高句麗王伯固の死後、その息子延優（山上王 197-227）が即位したが、これに反発した兄の発岐は公孫氏を頼って延優に対抗し、遼東

へ移り住んだ。延優は公孫氏と発岐から逃れて南に移動し、古くからの重要拠点である国内城（集安）で新国を建てた。この新国がその後の高句麗の歴史を担うことになり、国内城は高句麗の王都となった。国内城は旧高句麗県の県城を居城として転用したもので、背後の山には緊急用の大規模な山城（丸都城、山城子山域）が築かれた。山城の丸都城と平城の国内城とは一体となって王都を構成した。

高句麗は漢の滅亡の後に魏と結び、司馬懿率いる魏軍が公孫氏を討伐する際には援兵も出したが、242 年には延優の跡を継いだ憂位居(東川王)が西安平を寇掠し魏と衝突するようになった。魏は将軍毌丘倹の指揮の下で数度に渡り高句麗への遠征を行った。東川王は 20,000 の兵を率いて迎え撃ったが敗退し、丸都城を落とされた。毌丘倹は将兵に墳墓破壊を禁じ捕虜と首都を返還したが高句麗は服属せず、魏は 245 年に再び侵攻した。高句麗は南北の 2 方向から侵攻した魏軍との激しい戦いの末に敗れた。東川王は沃沮・不耐の故地にまで逃がれて魏軍の追撃から身を隠した。

この間、中国では魏から晋への交替が行われた。

高句麗はこの戦争の敗北から立ち直り、美川王(乙弗)が即位したころには、従来からの五部体制を維持しつつも国王権力の集中が推し進められ官位制度が整備されるなど内政面の強化が行われた。311 年には丹東を攻略して朝鮮半島の郡県を中国本国から切り離し、盛んに楽浪郡や帯方郡を攻撃した。313 年には楽浪郡を占領し朝鮮半島北部の支配を確立した。高句麗は平壌を新たな拠点として確保する一方で、楽浪郡に残った漢人に対しては緩やかな支配で臨んだ。更に北方では夫余を攻撃してその本拠地を支配下に置いた。

同時期に勢力を大幅に強めていた鮮卑の慕容氏が高句麗と直接対峙するようになった。高句麗は撫順に移転していた玄菟郡を倒し、その地に新城（高爾山城）を築いて西方の拠点とした。しかし、慕容氏の慕容皝は 342 年に大軍をもって高句麗に侵攻した。高句麗はこの戦いに敗れ丸都城が再び失陥した。高句麗王釗（故国原王）は翌年、前燕に臣下の礼を取り王弟を入朝させることによって難局を乗り切った。350 年代には前燕に人質を入れて戦争中に捕らわれていた王母を取りもどし、征東大将軍・営州刺史・楽浪公として冊封された。この頃、朝鮮半島中央部で新たに馬韓諸国が統合して形成されていた百済の近肖古王によって旧帯方地域が奪われた。故国原王は 369 年と 371 年に百済を攻撃したが、これに敗れ、逆に平壌を攻撃した百済軍との戦いで流れ矢にあたり戦死した。

国王戦死によって高句麗は混乱し、跡を継いだ小獣林王は前燕を滅ぼした前秦との関係強化に努めた。372 年に秦王苻堅から僧順道や仏典・仏像が贈られ、375 年には寺院が建立された。これが高句麗への仏教公伝である。

この引用文における戦闘は、正史で確認していない。

次の高句麗王は碑文で有名な広開土王(好太王)391-412 で、その次の長寿王 413-491 は 427 年に平壌へ遷都した。

おわりに

付録Ⅰ 三国史記高句麗東明聖王紀前文

始祖 東明聖王 姓高氏 諱朱蒙 【一云鄒牟 一云衆解】 先是 扶餘王解夫婁老無子 祭山川求嗣 其所御馬至鯤淵 見大石 相對流淚 王怪之 使人轉其石 有小兒 金色蛙形 【蛙 一作蝸】 王喜曰 此乃天賚我令胤乎 乃收而養之 名曰金蛙 及其長 立爲太子 後其相阿蘭弗曰 日者天降我曰 將 使吾子孫立國於此 汝其避之 東海之濱有地 號曰迦葉原 土壤膏腴宜五穀 可都也 阿蘭弗遂勸王 移都於彼 國號東扶餘 其舊都有人不知所從來 自稱天 帝子解慕漱 來都焉 及解夫婁薨 金蛙嗣位 於是時 得女子於太白山南優渤水 問之 曰 我是河伯之女 名柳花 與諸弟出遊 時有一男子 自言天帝子解慕 漱 誘我於熊心山下鴨邊室中私之 即往不返 父母責我無媒而從人 遂謫居優渤水 金蛙異之 幽閉於室中 爲日所 引身避之 日影又逐而之 因而有孕 生一 卵 大如五升許 王棄之與犬豕 皆不食 又棄之路中 牛馬避之 後棄之野 鳥覆翼之 王欲剖之不能破 遂還其母 其母以物裹之 置於暖處 有一男兒 破 殼而出 骨表英奇 年甫七歲 嶷然異常 自作弓矢射之 百發百中 扶餘俗語 善射爲朱蒙 故以名云 金蛙有七子 常與朱蒙遊戲 其伎能皆不及朱蒙 其長子 帶素言於王曰 朱蒙非人所生 其爲人也勇 若不早圖 恐有後患 請除之 王不聽 使之養馬 朱蒙知其駿者 而減食令瘦 駑者善養令肥 王以肥者自乘 瘦者 給朱蒙 後獵于野 以朱蒙善射 與其矢少 而朱蒙殪獸甚多 王子及諸臣又謀殺之 朱蒙母陰知之 告曰 國人將害汝 以汝才略 何往而不可 與其遲留而受辱 不若遠適以有爲 朱蒙乃與烏伊摩離陜父等三人爲友 行至淹水 【一名盖斯水

在今鴨東北】 欲渡無梁 恐爲追兵所迫 告水曰 我是天帝子 河伯外孫 今 日逃走 追者垂及如何 於是 魚鼈浮出成橋 朱蒙得渡 魚鼈乃解 追騎不得渡 朱蒙行至毛屯谷 【魏書云 至普述水】 遇三人 其一人着麻衣 一人着衲衣 一人着水藻衣 朱蒙問曰 子等何許人也 何姓何名乎 麻衣者曰 名再思 衲衣者曰 名武骨 水藻衣者曰 名默居 而不言姓 朱蒙賜再思姓克氏 武骨仲室 氏 默居少室氏 乃告於衆曰 我方承景命 欲啓元基 而適遇此三賢 豈非天賜乎 遂揆其能 各任以事 與之俱至卒本川 【魏書云 至升骨城】 觀其土壤肥 美 山河險固 遂欲都焉 而未遑作宮室 但結廬於沸流水上居之 國號高句麗 因以高爲氏 【一云 朱蒙至卒本扶餘 王無子 見朱蒙知非常人 以其女妻之 王薨 朱蒙嗣位】 時朱蒙年二十二歲 是漢孝元帝建昭二年 新羅始祖赫居世二十一年甲申歲也 四方聞之 來附者衆 其地連靺鞨部落 恐侵盜爲害 遂攘斥之 靺鞨畏服 不敢犯焉 王見沸流水中 有菜葉逐流下 知有人在上流者 因以獵往尋 至沸流國 其國王松讓出見曰 寡人僻在海隅 未嘗得見君子 今日邂逅相 遇 不亦幸乎 然不識吾子自何而來 答曰 我是天帝子 來都於某所 松讓曰 我累世爲王 地小不足容兩主 君立都日淺 爲我附庸可乎 王忿其言 因與之鬪 辯 亦相射以校藝 松讓不能抗

付録２　正史の隋書までの高句麗条

後漢書

高句驪 在遼東之東韆浬/裏/裡 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與伕餘接 地方二韆浬/裏/裡 多大山深穀 人隨而為居 少田業 力作不足以自資 故其俗節于飲食 而好脩宮室 東夷相傳以為伕餘別/彆種 故言語法則多同 而跪拜拙一腳 行步皆走 凡有五族 有消奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本消奴部為王 稍微弱 後桂婁部代之 其置官 有相加 對盧 沛者 古鄒大加 主簿 優檯/臺/颱 使者 帛衣先人 武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟 賜鼓吹伎人 其俗淫 皆潔凈/淨自熹 暮夜輒男女群聚為倡樂 好祠鬼神 社稷 零星 以十月祭天大會 名曰“東盟” 其國東有大穴 號襚神 亦以十月迎而祭之 其公會衣服皆錦繡 金銀以自飾 大加 主簿皆著幘 如冠幘而無後；其小加著折風 形如弁 無牢獄 有罪 諸加評議便殺之 沒入妻子為奴婢 其昏姻皆就婦傢 生子長大 然後將還 便稍營送終之具 金銀財幣儘/盡于厚葬 勣/積石為封 亦種鬆柏 其人性兇急 有氣力 習戰鬥 好寇鈔 沃沮 東濊皆屬焉 句驪一名貊 有別/彆種 依小水為居 因名曰小水貊 齣好弓 所謂“貊弓”是也

王莽初 發/髮句驪兵以伐匈奴 其人不欲行 強/彊迫遣之 皆亡齣塞為寇盜 遼西大尹田譚追擊 戰死 莽令其將嚴尤擊之 誘句驪侯騶入塞 斬之 傳首長安 莽大說 更名高句驪王為下句驪侯 于是貊人寇邊愈甚 建武八年 高句驪遣使朝貢 光武復/複其王號 二十三年鼕 句驪蠶支落大加戴升等萬餘口詣樂浪內屬 二十五年春 句驪寇右北平 漁暘/陽 上穀 太原 而遼東太守祭肜以恩信招之 皆復/複款塞

后句驪王宮生而開目能視 國人懷之 及長勇壯 數犯邊境 和帝元興元年春 復/複入遼東 寇略六縣 太守耿夔擊破之 斬其渠帥 安帝永初五年 宮遣使貢獻 求屬玄菟 元初五年 復/複與濊貊寇玄菟 攻華麗城 建光元年春 幽州刺史馮煥 玄菟太守姚光 遼東太守蔡諷等 將兵齣塞擊之 捕斬濊貊渠帥 獲/穫兵馬財物 宮迺遣嗣子遂成將二韆餘人逆光等 遣使詐降；光等信之 遂成因據險阨以遮大軍 而潛遣三韆人攻玄菟 遼東 焚城郭 殺傷二韆餘人 于是發/髮廣暘/陽 漁暘/陽 右北平 涿郡屬國三韆餘騎同救之 而貊人已去 夏 復/複與遼東鮮卑八韆餘人攻遼隊 殺略吏人 蔡諷等追擊于新昌 戰歿功曹耿耗 兵曹掾龍耑 兵馬掾公孫酺以身捍諷 俱歿于陣 死者百餘人 鞦 宮遂率馬韓濊貊數韆騎圍玄菟 伕餘王遣子尉仇檯/臺/颱將二萬餘人 與州郡並/併力討破之 斬首五百餘級

是歲宮死 子遂成立 姚光上言欲因其喪發/髮兵擊之 議者皆以為可許 尚書陳忠曰：“宮前桀黠 光不能討 死而擊之 非義也 宜遣弔問 因責讓前罪 赦不加誅 取其後善 ”安帝從之 明年 遂成還漢生口 詣玄菟降 詔曰：“遂成等桀逆無狀 儅/噹/當斬斷DI 73醢 以示百姓 倖會赦令 乞罪請降 鮮卑 濊貊連年寇鈔 驅略小民 動以韆數 而裁送數十百人 非嚮化之心也 自今已後 不與縣官戰鬥而自以親附送生口者 皆與贖直 縑人四十匹 小口半之 ”遂成死 子伯固立 其後濊貊率服 東垂少事 順帝暘/陽嘉元年 置玄菟郡屯田六部 質 桓之間 復/複犯遼東西安平 殺帶方令 掠得樂浪太守妻子 建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首數百級 伯固降服 乞屬玄菟雲

三国志

高句麗在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與夫餘接 都於丸都之下 方可二千里 戶三萬 多大山深谷 無原澤 隨山谷以爲居 食澗 水 無良田 雖力佃作 不足以實口腹 其俗節食 好治宮室 於所居之左右立大屋 祭鬼神 又祀靈星 社稷 其人性凶急 善寇鈔 其國有王 其官有相加 對 盧 沛者 古雛加 主簿 優台丞 使者 皁衣先人 尊卑各有等級 東夷舊語以爲夫餘別種 言語諸事 多與夫餘同 其性氣衣服有異 本有五族 有涓奴部 絕 奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王 稍微弱 今桂婁部代之 漢時賜鼓吹技人 常從玄菟郡受朝服衣幘 高句麗令主其名籍 後稍驕恣 不復詣郡於 東界築小城 置朝服衣幘其中 歲時來取之 今胡猶名此城爲幘溝漊 溝漊者 句麗名城也 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置對盧 王之宗族 其大加皆 稱古雛加 涓奴部本國主 今雖不爲王 適統大人 得稱古雛加 亦得立宗廟 祠靈星 社稷 絕奴部世與王婚 加古雛之號 諸大加亦自置使者 皁衣先人 名皆 達於王 如卿大夫之家臣會同坐起 不得與王家使者 皁衣先人同列 其國中大家不佃作 坐食者萬餘口 下戶遠擔米糧魚鹽供給之 其民喜歌舞 國中邑落 暮 夜男女群聚 相就歌戲 無大倉庫 家家自有小倉 名之爲桴京 其人絜清自喜 喜藏釀 跪拜申一脚 與夫餘異 行步皆走 以十月祭天 國中大會 名曰東盟 其公會 衣服皆錦繡金銀以自飾 大加主簿頭著幘 如幘而無餘 其小加著折風 形如弁 其國東有大穴 名隧穴 十月國中大會 迎隧神還于國東上祭之 置木隧 於神坐 無牢獄 有罪諸加評議 便殺之 沒入妻子爲奴婢 其俗作婚姻言語已定 女家作小屋於大屋後 名婿屋 婿暮至女家戶外 自名跪拜 乞得就女宿 如是者再三 女父母乃聽使就小屋中宿 傍頓錢帛 至生子已長大 乃將婦歸家 其俗淫 男

女已嫁娶 便稍作送終之衣 厚葬 金銀財幣 盡於送死 積石爲封 列 種松柏 其馬皆小便登山 國人有氣力 習戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉 又有小水貊 句麗作國 依大水而居 西安平縣北有小水 南流入海 句麗別種依小水作 國 因名之爲小水貊 出好弓 所謂貊弓是也

王莽初發高句麗兵以伐胡 不欲行 強迫遣之 皆亡出塞爲寇盜 遼西大尹田譚追擊之爲所殺 州郡縣歸咎于句麗侯騶 嚴尤奏言:「貊人犯法 罪不 起於騶 且宜安慰 今猥被之大罪 恐其遂反 」莽不聽 詔尤擊之 尤誘期句麗侯騶至而斬之 傳送其首詣長安 莽大悅 佈告天下 更名高句麗爲下句麗 當此 時爲侯國 漢光武帝八年 高句麗王遣使朝貢 始見稱王

至殤 安之間 句麗王宮數寇遼東 更屬玄菟 遼東太守蔡風 玄菟太守姚光以宮爲二郡害 興師伐之 宮詐降請和 二郡不進 宮密遣軍攻玄菟 焚燒候城 入遼隧 殺吏民 後宮復犯遼東 蔡風輕將吏士追討之 軍敗沒

宮死 子伯固立 順 桓之間 復犯遼東 寇新安 居鄉 又攻西安平 於道上殺帶方令 略得樂浪太守妻子 靈帝建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首虜數百級 伯固降 屬遼東（嘉）平中 伯固乞屬玄菟 公孫度之雄海東也 伯固遣大加優居 主簿然人等助度擊富山賊 破之

伯固死 有二子 長子拔奇 小子伊夷模 拔奇不肖 國人便共立伊夷模爲王 自伯固時數寇遼東 又受亡胡五百餘家 建安中 公孫康出軍擊之 破 其國 焚燒邑落 拔奇怨爲兄而不得立 與涓奴加各將下戶三萬餘口詣康降 還住沸流水 降胡亦叛伊夷模 伊夷模更作新國 今日所在是也 拔奇遂往遼東 有子 留句麗國 今古雛加駮位居是也 其後復

擊玄菟 玄菟與遼東合擊 大破之

伊夷模無子 淫灌奴部 生子名位宮 伊夷模死 立以爲王 今句麗王宮是也 其曾祖名宮 生能開目視 其國人惡之 及長大 果凶虐 數寇鈔 國見 殘破 今王生墮地 亦能開目視人 句麗呼相似爲位 似其祖 故名之爲位宮 位宮有力勇 便鞍馬 善獵射 景初二年 太尉司馬王率衆討公孫淵 宮遣主簿大加 將數千人助軍 正始三年 宮寇西安平 其五年 爲幽州刺吏毌丘儉所破 語在儉傳

宋書

東夷高句驪國 今治漢之遼東郡 高句驪王高璉 晉安帝義熙九年 遣長史高翼奉表獻赭白馬 以璉為使持節 都督營州諸軍事 征東將軍 高句驪王 樂浪 公 高祖踐阼 詔曰：「使持節 都督營州諸軍事 征東將軍 高句驪王 樂浪公璉 使持節 督百濟諸軍事 鎮東將軍 百濟王映 並執義海外 遠修貢職 惟新 告始 宜荷國休 璉可征東大將軍 映可鎮東大將軍 持節 都督 王 公如故 」三年 加璉散騎常侍 增督平州諸軍事 少帝景平二年 璉遣長史馬婁等詣闕獻 方物 遣使慰勞之 曰：「皇帝問使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高句驪王 樂浪公 纂戎東服 庸績繼軌 厥惠既彰 款誠亦著 踰遼越 海 納貢本朝 朕以不德 忝承鴻緒 永懷先蹤 思覃遺澤 今遣謁者朱邵伯 副謁者王邵子等 宣旨慰勞 其茂康惠政 永隆厥功 式昭往命 稱朕意焉 」

先是 鮮卑慕容寶治中山 為索虜所破 東走黃龍 義熙初 寶弟熙為其下馮跋所殺 跋自立為主 自號燕王 以其治黃龍城 故謂之黃龍國 跋死 子弘立 [11]屢 為索虜所攻 不能下 太祖世 每歲遣使獻方物 元嘉十二年 賜加除授 十五年 復為索虜所攻 弘敗走

奔高驪北豐城 表求迎接 太祖遣使王白駒 趙次興迎 之 并令高驪料理資遣 璉不欲使弘南 乃遣將孫漱 高仇等襲殺之 白駒等率所領七千餘人掩討漱等 生禽漱 殺高仇等二人 璉以白駒等專殺 遣使執送之 上 以遠國 不欲違其意 白駒等下獄 見原

璉每歲遣使 十六年 太祖欲北討 詔璉送馬 璉獻馬八百匹 世祖孝建二年 璉遣長史董騰奉表慰國哀再周 并獻方物 大明三年 又獻肅慎氏楛矢石砮 七年 詔曰：「使持節散騎常侍 督平營二州諸軍事 征東大將軍 高句驪王 樂浪公璉 世事忠義 作藩海外誠係本朝 志剪殘險 通譯沙表 克宣王猷 宜 加褒進 以旌純節 可車騎大將軍 開府儀同三司 持節 常侍 都督 王 公如故 」太宗泰始 後廢帝元徽中 貢獻不絕

南齊書

東夷高麗國 西與魏虜接界 宋末 高麗王樂浪公高璉爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 車騎大將軍 開府儀同三司 太祖建元元年 進號驃騎大將軍 三年 遣使貢獻乘舶泛海 使驛常通 亦使魏虜 然彊盛不受制

虜置諸國使邸 齊使第一 高麗次之 永明七年 平南參軍顏幼明 冗從僕射劉思敎使虜虜元會 與高麗使相次 幼明謂偽主客郎裴叔令曰：「我等銜 命上華 來造卿國 所爲抗敵 在乎一魏 自餘外夷 理不得望我鑣塵 況東夷小貊 臣屬朝廷 今日乃敢與我躡踵 」思籗謂偽南部尚書李思沖曰：「我聖朝處魏 使 未嘗與小國列 卿亦應知 」思沖曰：「實如此 但主副不得升殿耳 此間坐起甚高 足以相報 」思敎曰：「李道固昔使 正以衣冠致隔耳 魏國必纓冕而 至 豈容見黜 」幼明又謂虜主曰：「二國相亞 唯齊與魏 邊境小狄 敢躡臣蹤！」

高麗俗服窮袴 冠折風一梁 謂之幘 知讀《五經》 使人在京師 中書郎王融戲之曰：「服之不衷 身之災也 頭上定是何物？」答曰：「此卽古弁之遺像也 」

高璉年百餘歲卒 隆昌元年 以高麗王樂浪公高雲爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高麗王 樂浪公 建武三年 原闕

報功勞勤 實存名烈 假行寧朔將軍臣姐瑾等四人 振竭忠效 攘除國難 志勇果毅 等威名將 可謂扞城 固蕃社稷 論功料勤 宜在甄顯 今依例輒假行 職 伏願恩潛 聽除所假寧朔將軍 面中王姐瑾 曆贊時務 武功竝列 今假行冠軍將軍 都將軍 都漢王 建威將軍 八中侯餘古 弱冠輔佐 忠效夙著 今假 行寧朔將軍 阿錯王 建威將軍餘曆 忠款有素 文武烈顯 今假行龍驤將軍 邁盧王 廣武將軍餘固 忠效時務 光宣國政 今假行建威將軍 弗斯侯 」

梁書

高句驪者 其先出自東明 東明本北夷槀離王之子 離王出行 其侍兒於後任娠 離王還欲殺之 侍兒曰：「前見天上有氣如大雞子 來降我 因以有 娠 」王囚之 後遂生男 王置之豕牢 豕以口氣噓之 不死 王以爲神 乃聽收養 長而善射 王忌其猛 復欲殺之 東明乃奔走 南至淹滯水 以弓擊水 魚鱉 皆浮爲橋 東明乘之得渡 至夫餘而王焉 其後支別爲句驪種也 其國 漢之玄菟郡也 在遼東之東 去遼東千里 漢 魏世 南與朝鮮 穢貊 東與沃沮 北與夫 餘接 漢武帝元封四年 滅朝鮮 置玄菟郡 以高句驪爲縣以屬之 句驪地方可二千里 中有遼山 遼水所出 其王都於丸都之下 多大山深谷 無原澤 百姓依之以居 食澗水 雖土著 無良田 故其俗節食 好治宮 室 于所居之左立大屋 祭鬼神

又祠零星 社稷 人性凶急 喜寇抄 其官 有相加 對盧 沛者 古鄒加 主簿 優臺 使者 皁衣先人 尊卑各有等級 言語 諸事 多與夫餘同 其性氣 衣服有異 本有五族 有消奴部 絕奴部 慎奴部 藿奴部 桂婁部 本消奴部爲王 微弱 桂婁部代之 漢時賜衣幘 朝服 鼓吹 常從玄菟郡受之 後稍驕 不復詣郡 但於東界築小城以受之 至今猶名此城爲幘溝婁 「溝婁」者 句驪名「城」也 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置 對盧 其俗喜歌儛 國中邑落男女 每夜羣聚歌戲 其人潔清自喜 善藏釀 跪拜申一脚 行步皆走 以十月祭天大會 名曰「東明」 其公會衣服 皆錦繡金銀以 自飾 大加 主簿頭所著似幘而無後；其小加著折風 形如弁 其國無牢獄 有罪者 則會諸加評議殺之 沒入妻子 其俗好淫 男女多相奔誘 已嫁娶 便稍作送 終之衣 其死葬 有槨無棺 好厚葬 金銀財幣盡於送死 積石爲封 列植松柏 兄死妻嫂 其馬皆小 便登山 國人尚氣力 便弓矢刀矛 有鎧甲 習戰鬬 沃 沮 東穢皆屬焉

王莽初 發高驪兵以伐胡 不欲行 強迫遣之 皆亡出塞爲寇盜 州郡歸咎於句驪侯騶 嚴尤誘而斬之 王莽大悅 更名高句驪爲下句驪 當此時爲侯 矣 光武八年 高句驪王遣使朝貢 始稱王 至殤 安之間 其王名宮 數寇遼東 玄菟太守蔡風討之不能禁 宮死 子伯固立 順 和之間 復數犯遼東寇抄 靈 帝建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首虜數百級 伯固乃降屬遼東 公孫度之雄海東也 伯固與之通好 伯固死 子伊夷摸立 伊夷摸自伯固時已數寇遼東 又受亡 胡五百餘戶 建安中 公孫康出軍擊之 破其國 焚燒邑落 降胡亦叛伊夷摸 伊夷摸更作新國 其後伊夷摸復擊玄菟 玄菟與遼東合擊 大破之

伊夷摸死 子位宮立 位宮有勇力 便鞍馬 善射獵 魏景初二年 遣太傅司馬宣王率衆討公孫淵 位宮遣主簿 大加將兵千人助軍 正始三年 位宮寇 西安 嘉平 五年 幽州刺史

母丘儉將萬人出玄菟討位宮 位宮將步騎二萬人逆軍 大戰於沸流 位宮敗走 儉軍追至峴 懸車束馬 登丸都山 屠其所都 斬首虜 萬餘級 位宮單將妻息遠竄 六年 儉復討之 位宮輕將諸加奔沃沮 儉使將軍王頎追之 絕沃沮千餘里 到肅慎南界 刻石紀功；又到丸都山 銘不耐城而還 其 後 復通中夏

晉永嘉亂 鮮卑慕容廆據昌黎大棘城 元帝授平州刺史 句驪王乙弗利頻寇遼東 廆不能制 弗利死 子釗代立 康帝建元元年 慕容廆子晃率兵伐之 釗與戰 大敗 單馬奔走 晃乘勝追至丸都 焚其宮室 掠男子五萬餘口以歸 孝武太元十年 句驪攻遼東 玄菟郡後燕慕容垂遣弟農伐句驪 復二郡 垂死 子 寶立 以句驪王安爲平州牧 封遼東 帶方二國王 安始置長史 司馬 參軍官 後略有遼東郡 至孫高璉 晉安帝義熙中 始奉表通貢職 歷宋 齊並授爵位 年 百餘歲死 子雲 齊隆昌中 以爲使持節 散騎常侍 都督營平二州 征東大將軍 樂浪公 高祖卽位 進雲車騎大將軍 天監七年 詔曰：「高驪王樂浪郡公 雲 乃誠款著 貢驛相尋 宜隆秩命 式弘朝典 可撫東大將軍 開府儀同三司 持節常侍 都督 王並如故 」十一年 十五年 累遣使貢獻 十七年 雲死 子安立 普通元年 詔安纂襲封爵 持節 督營 平二州諸軍事 寧東將軍 七年 安卒 子延立 遣使貢獻 詔以延襲爵 中大通四年 六年 大同元年 七年 累奉表獻方物 太清二年 延卒 詔以其子襲延爵位

魏書

高句麗者 出於夫餘 自言先祖朱蒙 朱蒙母河伯女 為夫餘王閉於室中 為日所照 引身避之 日影又逐 既而有孕 生一卵 大如五升 夫餘王棄之與 犬 犬不食；棄之與豕 豕

又不食；棄之於路 牛馬避之；後棄之野 眾鳥以毛茹之 夫餘王割剖之 不能破 遂還其母 其母以物裹之 置於暖處 有一男破殼而 出 及其長也 字之曰朱蒙 其俗言「朱蒙」者 善射也 夫餘人以朱蒙非人所生 將有異志 請除之 王不聽 命之養馬 朱蒙每私試知有善惡 駿者減食令 瘦 駑者善養令肥 夫餘王以肥者自乘 以瘦者給朱蒙 後狩于田以朱蒙善射 限之一矢 朱蒙雖矢少 殪獸甚多 夫餘之臣又謀殺之 朱蒙母陰知 告朱蒙曰： 「國將害汝 以汝才略 宜遠適四方 」朱蒙乃與烏引 烏違等二人 棄夫餘 東南走中道遇一大水 欲濟無梁 夫餘人追之甚急 朱蒙告水曰：「我是日子 河 伯外孫 今日逃走 追兵垂及 如何得濟？」於是魚鼈並浮 為之成橋 朱蒙得渡 魚鼈乃解 追騎不得渡朱蒙遂至普述水 遇見三人 其一人著麻衣 一人著納 衣 一人著水藻衣 與朱蒙至紇升骨城 遂居焉 號曰高句麗 因以為氏焉

初 朱蒙在夫餘時 妻懷孕 朱蒙逃後生一子 字始閭諧 及長 知朱蒙為國主 即與母亡而歸之 名之曰閭達 委之國事 朱蒙死 閭達代立 閭達死 子 如栗代立 如栗死 子莫來代立 乃征夫餘 夫餘大敗 遂統屬焉 莫來子孫相傳 至裔孫宮 生而開目能視 國人惡之 及長凶虐 國以殘破 宮曾孫位宮亦生而 視 人以其似曾祖宮 故名為位宮 高句麗呼相似為「位」 位宮亦有勇力 便弓馬 魏正始中 入寇遼西安平［1]為 幽州刺史毌丘儉所破 其玄孫乙弗利 利子釗 烈帝時與慕容氏相攻擊 建國四年 慕容元真率眾伐之 入自南陝 戰於木底 大破釗軍 乘勝長驅 遂入丸都 釗 單馬奔竄 元真掘釗父墓載其屍 并掠其母妻 珍寶 男女五萬餘口 焚其宮室 毀丸都城而還 自後釗遣使來朝阻隔寇讎 不能自達 釗後為百濟所殺

世祖時 釗曾孫璉始遣使者安東奉表貢方物 并請國諱 世祖嘉其誠款 詔下帝系名諱於

其國 遣員外散騎侍郎李敖拜璉為都督遼海諸軍事 征東將軍 領護 東夷中郎將 遼東郡開國公 高句麗王 敖至其所居平壤城 訪其方事 云：遼東南一千餘里 東至柵城 南至小海 北至舊夫餘 民戶參倍於前 魏時 其地東西 二千里 南北一千餘里 民皆土著隨山谷而居 衣布帛及皮 土田薄墝 蠶農不足以自供 故其人節飲食 其俗淫 好歌舞夜則男女羣聚而戲 無貴賤之節 然 潔淨自喜 其王好治宮室 其官名有謁奢 太奢 大兄 小兄之號 頭著折風 其形如弁 旁插鳥羽 貴賤有差 立則反拱 跪拜曳一脚 行步如走 常以十月祭 天 國中大會 其公會 衣服皆錦繡 金銀以為飾 好蹲踞 食用俎几 出三尺馬 云本朱蒙所乘 馬種即果下也 後貢使相尋 歲致黃金二百斤 白銀四百斤

時馮文通率眾奔之 世祖遣散騎常侍封撥詔璉令送文通 璉上書稱當與文通俱奉王化竟不送 世祖怒 欲往討之 樂平王丕等議待後舉 世祖乃止 而文通亦尋為璉所殺

後文明太后以顯祖六宮未備 敕璉令薦其女 璉奉表 云女已出嫁 求以弟女應旨 朝廷許焉 乃遣安樂王真 尚書李敷等至境送幣 璉惑其左右之說 云朝 廷昔與馮氏婚姻 未幾而滅其國 殷鑒不遠 宜以方便辭之 璉遂上書妄稱女死 朝廷疑其矯詐 又遣假散騎常侍程駿切責之 若女審死者 聽更選宗淑 璉云：「若天子恕其前愆 謹當奉詔 」會顯祖崩 乃止

至高祖時 璉貢獻倍前 其報賜亦稍加焉 時光州於海中得璉所遣詣蕭道成使餘奴等送闕 高祖詔責璉曰：「道成親殺其君 竊號江左 朕方欲興滅國於舊 邦 繼絕世於劉氏 而卿越境外交 遠通篡賊 豈是藩臣守節之義！今不以一過掩卿舊款 即送還藩 其感恕思愆 祗承明憲 輯寧所部 動靜以聞 」

太和十五年 璉死 年百餘歲 高祖舉哀於東郊 遣謁者僕射李安上策贈車騎大將軍 太

傳 遼東郡開國公 高句麗王 諡曰康 又遣大鴻臚拜璉孫雲使持 節 都督遼海諸軍事 征東將軍 領護東夷中郎將 遼東郡開國公 高句麗王 賜衣冠服物車旗之飾 又詔雲遣 世子入朝 令及郊丘之禮 雲上書辭疾 惟遣其從叔 升于隨使詣闕 嚴責之 自此歲常貢 獻 正始中 世宗於東堂引見其使芮悉弗 [2]悉 弗進曰:「高麗係誠天極 累葉純誠 地 產土毛 無愆王貢 但黃金出自夫餘 珂則涉羅所產 今夫餘為勿吉所逐 涉羅為百濟所 并 國王臣雲惟繼絕之義 悉遷于 境內 二品所以不登王府 實兩賊是為 」世宗曰:「高 麗世荷上將 專制海外 九夷黠虜 實得征之 瓶罄罍耻 誰之咎也？昔方貢之愆 責在連 率 卿宜宣朕旨 於卿主 務盡威懷之略 揃披害羣 輯寧東裔 使二邑還復舊墟 土毛無 失常貢也 」

神龜中 雲死 靈太后為舉哀於東堂 遣使策贈車騎大將軍 領護東夷校尉 遼東郡開國 公 高句麗王 又拜其世子安為安東將軍 領護東夷校尉 遼東郡開 國公 高句麗王 正 光初 光州又於海中執得蕭衍所授安寧東將軍衣冠劍佩 及使人江法盛等 送於京師 安 死 子延立 出帝初 詔加延使持節 散騎常侍 車騎 大將軍 領護東夷校尉 遼東郡開國 公 高句麗王 賜衣冠服物車旗之飾 天平中 詔加延侍中 驃騎大將軍 餘悉如故 延死 子成立 訖於武定末 其貢使無歲 不至

周書

高麗者 其先出於夫餘 自言始祖曰朱蒙 河伯女感日影所孕也 朱蒙長而有材畧 夫餘 人惡而逐之 土于紇斗骨城 自號曰高句麗 仍以高為氏 其孫莫來漸盛 擊夫餘而臣之

莫來裔孫璉 始通使於後魏

其地 東至新羅 西渡遼水二千里 南接百濟 北鄰靺鞨千餘里 治平壤城 其城 東西六里 南臨浿水 城內唯積倉儲器備 寇賊至日 方入固守 王則別為宅於其側 不常居之 其外有國內城及漢城 亦別都也 復有遼東 玄菟等數十城 皆置官司 以相統攝

大官有大對盧 次有太大兄 大兄 小兄 意俟奢 烏拙 太大使者 大使者 小使者 褥奢 翳屬 仙人幷褥薩凡十三等 分掌內外事焉 其大對盧 則以彊弱相陵 奪而自為之 不由王之署置也 其刑法：謀反及叛者 先以火焚爇 然後斬首 籍沒其家 盜者 十餘倍徵贓 若貧不能備 及負公私債者 皆聽評 其子女為奴婢以償之

丈夫衣同袖衫 大口褲 白韋帶 黃革履 其冠曰骨蘇 多以紫羅為之 雜以金銀為飾 其有官品者 又插二鳥羽於其上 以顯異之 婦人服裙襦 裾袖 皆為袂 書籍有《五經》《三史》《三國志》《晉陽秋》 兵器有甲弩弓箭戟矟矛鋋 賦稅則絹布及粟 隨其所有 量貧富差等輸之 土田墉薄 居處節儉 然尚容止 多詐偽 言辭鄙穢 不簡親疏 乃至同川而浴 共室而寢 風俗好淫 不以為愧 有游女者 夫無常人 婚娶之禮 畧無財幣 若受財者 謂之賣婢 俗 甚恥之 父母及夫喪 其服制同於華夏 兄弟則限以三月 敬信佛法 尤好淫祀 又有神廟二所：一曰夫餘神 刻木作婦人之象；一曰登高神 云是其始祖夫餘神之 子 竝置官司 遣人守護 蓋河伯女與朱蒙云

璉五世孫成 大統十二年 遣使獻其方物 成死 子湯立 建德六年 湯又遣使來貢 高祖拜湯為上開府儀同大將軍 遼東郡開國公 遼東王

隋書

高麗之先 出自夫餘 夫余王嘗得河伯女 因閉於室內 爲日光隨而照之 感而遂孕 生一大卵 有一男子破殼而出 名曰硃蒙 夫余之臣以硃蒙非人所 生 鹹請殺之 王不聽 及壯 因從獵 所獲居多 又請殺之 其母以告硃蒙 硃蒙棄夫余東南走 遇一大水 深不可越 硃蒙曰:「我是河伯外孫 日之子也 今 有難 而追兵且及 如何得渡？」於是魚鱉積而成橋 硃蒙遂渡 追騎不得濟而還 硃蒙建國 自號高句麗 以高爲氏 硃蒙死 子閭達嗣 至其孫莫來興兵 遂並 夫餘 至裔孫位宮 以魏正始中入寇西安平 毌丘儉拒破之 位宮玄孫之子曰昭列帝 爲慕容氏所破 遂入丸都 焚其宮室 大掠而還 昭列帝后爲百濟所殺 其曾 孫璉 遣使後魏 璉六世孫湯 在周遣使朝貢 武帝拜湯上開府 遼東郡公 遼東王 高祖受禪 湯復遣使詣闕 進授大將軍 改封高麗王 歲遣使朝貢不絕

其國東西二千里 南北千餘里 都於平壤城 亦曰長安城 東西六里 隨山屈曲 南臨浿水 復有國內城 漢城 並其都會之所 其國中呼爲「三京」 與新羅每相侵奪 戰爭不息 官有太大兄 次大兄 次小兄 次對盧 次意侯奢 次烏拙 次太大使者 次大使者 次小使者 次褥奢 次翳屬 次仙人 凡十二 等 復有內評 外評 五部褥薩 人皆皮冠 使人加插鳥羽 貴者冠用紫羅 飾以金銀 服大袖衫 大口袴 素皮帶 黃革履 婦人裙襦加襈 兵器與中國略同 每 春秋校獵 王親臨之 人稅布五匹 谷五石 遊人則三年一稅 十人共細布一匹 租戶一石 次七鬥 下五鬥 反逆者縛之於柱 爇而斬之 籍沒其家 盜則償十 倍用刑既峻 罕有犯者 樂有五弦 琴 箏 篳篥 橫吹 簫 鼓之屬 吹蘆以和曲 每年初 聚戲于浿水之上 王乘腰輿 列羽儀以觀之 事畢 王以衣服入 水 分左右爲二部 以水石相濺擲 喧呼馳逐 再三而止 俗好蹲踞 潔淨自喜 以趨走爲敬 拜則曳一腳 立各反拱

行必搖手 性多詭伏 父子同川而浴 共室 而寢 婦人淫奔 俗多遊女 有婚嫁者 取男女相悅 然即爲之 男家送豬酒而已 無財聘之禮 或有受財者 人共恥之 死者殯于屋內經三年 擇吉日而葬 居 父母及夫之喪 服皆三年 兄弟三月 初終哭泣 葬則鼓舞作樂以送之 埋訖 悉取死者生時服玩車馬置於墓側 會葬者爭取而去 敬鬼神 多淫祠

開皇初 頻有使入朝 及平陳之後 湯大懼 治兵積穀 爲守拒之策 十七年 上賜湯璽書曰：

朕受天命 愛育率土 委王海隅 宣揚朝化 欲使圓首方足 各遂其心 王每遣使人 歲常朝貢 雖稱籓附 誠節未盡 王既人臣 須同朕德 而乃驅逼 靺鞨 固禁契丹 諸籓頓顙爲我臣妾 忿善人之慕義 何毒害之情深乎？太府工人 其數不少 王必須之 自可聞奏昔年潛行財貨 利動小人 私將弩手 逃竄 下國 豈非修理兵器 意欲不臧 恐有外聞 故爲盜竊？時命使者 撫尉王籓 本欲問彼人情 教彼政術 王乃坐之空館 嚴加防守 使其閉目塞耳 永無聞見 有 何陰惡 弗欲人知 禁制官司 畏其訪察？又數遣馬騎 殺害邊人 屢馳奸謀 動作邪說 心在不賓 朕於蒼生 悉如赤子 賜王土宇 授王官爵 深恩殊澤彰著 遐邇 王專懷不信 恆自猜疑 常遣使人 密覘消息 純臣之義 豈若是也？蓋當由朕訓導不明 王之愆違 一已寬恕 今日以後 必須改革 守籓臣之節 奉朝正 之典 自化爾籓 勿忤他國 則長享富貴 實稱朕心 彼之一方 雖地狹人少 然普天之下 皆爲朕臣今若黜王 不可虛置 終須更選官屬 就彼安撫 王若灑心 易行 率由憲章 即是朕之良臣 何勞別遣才彥也？昔帝王作法 仁信爲先 有善必賞 有惡必罰 四海之內 具聞朕旨王若無罪 朕忽加兵 自余籓國 謂朕何 也！王必虛心 納朕此意 慎勿疑惑 更懷異圖往者陳叔寶代在江陰 殘害人庶 驚動我烽候 抄掠我邊境 朕前後誡敕 經歷十年 彼則

恃長江之外 聚一隅之 衆 昏狂驕傲 不從朕言 故命將出師 除彼凶逆 來往不盈旬月 兵騎不過數千 歷代逋寇 一朝清蕩 遐邇乂安 人神胥悅 聞王歎恨 獨致悲傷 黜陟幽明 有司是職 罪王不爲陳滅 賞王不爲陳存 樂禍好亂 何爲爾也？王謂遼水之廣 何如長江？高麗之人 多少陳國？朕若不存含育 責王前愆 命一將軍 何待多 力！殷勤曉示 許王自新耳 宜得朕懷 自求多福

湯得書惶恐 將奉表陳謝 會病卒 子元嗣立 高祖使使拜元爲上開府 儀同三司 襲爵遼東郡公 賜衣一襲 元奉表謝恩 並賀祥瑞 因請封王 高祖優冊元爲王

明年 元率靺鞨之衆萬餘騎寇遼西 營州總管韋衝擊走之 高祖聞而大怒 命漢王諒爲元帥 總水陸討之 下詔黜其爵位 時饋運不繼 六軍乏食 師出 臨渝關 復遇疾疫 王師不振 及次遼水 元亦惶懼 遣使謝罪 上表稱「遼東糞土臣元」云云 上於是罷兵 待之如初 元亦歲遣朝貢 煬帝嗣位 天下全盛 高 昌王 突厥啟人可汗並親詣闕貢獻 於是征元入朝 元懼籓禮頗闕 大業七年 帝將討元之罪 車駕渡遼水 上營於遼東城 分道出師 各頓兵於其城下 高麗率兵 出拒 戰多不利 於是皆嬰城固守 帝令諸軍攻之 又敕諸將：「高麗若降者 即宜撫納 不得縱兵 」城將陷 賊輒言請降 諸將奉旨不敢赴機 先令馳奏 比報 至 賊守禦亦備 隨出拒戰 如此者再三 帝不悟 由是食盡師老 轉輸不繼 諸軍多敗績 於是班師 是行也 唯于遼水西拔賊武厲邏 置遼東郡及通定鎮而還 九年 帝復親征之 乃敕諸軍以便宜從事 諸將分道攻城 賊勢日蹙 會楊玄感作亂 反書至 帝大懼 即日六軍並還 兵部侍郎斛斯政亡入高麗 高麗具知事實 悉銳來追 殿軍多敗 十年 又發天下兵 會盜賊蜂起 人多流亡 所在阻絕 軍多失期 至遼水 高麗亦困弊 遣使乞降 囚送斛斯政以贖罪 帝許之 頓於懷遠 鎮 受其降款 仍以俘囚軍實歸 至京師

以高麗使者親告于太廟 因拘留之 仍征元入朝 元竟不至 帝敕諸軍嚴裝 更圖後舉 會天下大亂 遂不克復行